



Contents

- 巻頭言『地域は史料の宝庫』 経済学部教授 川東 靖弘 P2
- 『発見、私の図書館利用法』 人文学部社会学科4年 藤原直子 P2
- 私が薦めるこの一冊 法学部法学科4年 向居和也
- 統計データで見る松山大学図書館 P4
 - 経済学部助教授 松井名津 P3
 - 経営学部講師 松本 純



「高島亀太郎日記」(全6巻の一部)と資料類及び資料目録

地域は史料の宝庫

経済学部教授 川東 埤弘

松山大学は80年の歴史のある経済・経営を中心とした文科系の大学である。そのため、これまで数多くの資料が寄贈・寄託されている。その中で、私が関係した資料についてお知らせしたい。ひとつは高島亀太郎文庫。もうひとつは岡田温・慎吾文庫である。

高島亀太郎は、宇和島出身の実業家、政治家である。若いころから、生糸商、実業青年会、町会議員として活躍し、製糸業で大成し、愛媛県製糸業組合の組合長を長くつとめ、また、県会議員、衆議院議員、宇和島市長を務めた。また、俳人でもある。刻苦勉強努力の人という言葉があるが、亀太郎はまさにその言葉を地でいったような人物である。小学校しか出ていないが、向学心は強く、自学自習、独学を務め、また、多方面で精力的に活動し、地方では頂点に上り詰めた人物であった。その亀太郎関係の史料が宇和島の旧家から発見され、遺族から研究してくださいと松山大学に寄託され、松山大学では史料整理を行い、目録を作成し、また、遺族の方々と研究会をもち、研究を行った。そして、その成果が松山大学と愛媛新聞社から『高島亀太郎日記』（全6巻）として刊行されている。さらに、近く、亀太郎の伝記も出版の運びとなっている。大学は研究機関であり、このような地域の人物の活動の記録を掘り起こし、また、地域の人と一緒に研究することは、立派な地域貢献活動と言えると思う。

亀太郎の史料とならんで、松山市の岡田家からやはり、膨大な史料提供を受けた。岡田温は、愛媛の生んだ第一級の農村のリーダー、優れた農政家である。長らく帝国農会の幹事として活躍し、農会では大変著名な人物である。温は真に農民の立場に立って働き、農民の父として慕われた。また、郷土の純粋な

青年達から推され、一時衆議院議員も務めた。温もまた、それこそ、精力的に献身的に働いた。愛媛県では、温泉郡農会技師、愛媛県農会技師を務め、農事改良、煙害問題解決のために働き、中央では帝国農会幹事として働いた。温ほど県内および全国に講演・講話に走りまわった人はいないのではないかと思います。ほど、エネルギーに活動した。また、多くの原稿も執筆した。その温関係の資料が遺族の慎吾氏（愛媛県農業試験場長等歴任）から、自分は高齢でもう研究はできないので、若い人に父温の資料をつかって研究に役立ててほしいと、92年に松山大学に寄贈を申し出られた。さらに、95年8月慎吾氏が亡くなられたあと、2002年7月に慎吾氏の奥様の環さんから、父温の残りの資料並びに夫慎吾の資料も松山大学に寄贈したい、と申し出られ、9月に温・慎吾関係の資料類の寄贈を受けた。この時、本だけで3226冊、資料類はダンボール箱で108箱程もあった。実に膨大な資料で分類すると、帝国農会関係、愛媛県農会関係、各府県農会関係、農林省関係、愛媛県関係、帝国議会関係、帝国大学農科大学関係、別子の煙害関係、米騒動関係、敗戦後の農民組合関係、種々の農業雑誌、機関紙、新聞、パンフレット、江戸から明治期の教科書、岡田家の家計簿、土地所有、温の原稿、論文、温への手紙・ハガキ類、また、貴重な岡田温の日記等があった。これらの資料は、いずれも貴重な価値ある第一級の生資料であり、歴史的記録であった。これらの史料を整理し、解読し、研究するには、それこそ膨大な時間とエネルギーが必要であるが、研究してくださいとの要望には応えなければならない。それが、地域の大学としての義務・責務であろう。そのために、今、学生とともに研究に取り組んでいる。

『発見、私の図書館利用法』

人文学部社会学科4年 藤原 直子

図書館は私にとって駆け込み寺的存在である。私だけでなく、学生なら誰もが一度はお世話になっているのではないだろうか。いや、いないはずがない。そして、ついいつもギリギリに駆け込んで、欲しい本が貸出中だったりして、さらに焦ってしまうことの多いこと！試験前は特にそう。皆の為の図書が試験期間中に貸出停止になるのは仕方がないとはいえ、分かっているもやっぱりちょっと恨めしい。この苦い思いをする度に、次こそは早めにレポートを終わらせよう！と思うのだが、そうそう早めにやることなんてないのが現状だ。

また、図書館では、ちょっとした悔しさの他にもいろんなキモチを味わうことができる。本を読んで湧き起こる悲しみや喜び、感動はもちろん、勉強に集中する時の緊張感。さらに、あの大きめの椅子に座ってまったりしているときの眠たくなるような心地よさ。私は2階の窓際がお気に入り、お天気の良い日は外を眺めながらぼけ～とするのがたまらない。4年

次生になった今は講義もほとんどないので、県外にいる友達に手紙を書くのによく利用させてもらっている。（いつもありがとうございます。）まだ利用したことがない人は、是非一度図書館でゆっくり過ごしてみしてほしい。各階で雰囲気が違うので、きつとどこかにお気に入りの場所が見つかるに違いない。

最後に忘れてはならないのが、1つ。それは、出入口のゲートでのちょっとしたドキドキ感だ。あの静かな空間の中で鳴り響く「ピンコン」は、かなり恥ずかしいものがある。私も何度かひっかかったことがあり、あのゲートを通る時は必ず「今日も引っぱりませんように…」と強く念じてから、学生証を差し込むようにしている。そうするようになってからは一度も鳴っていないので、もうゲートと私は仲良しさんだ。うん、うん。恐れることなど何もない。そう思うことにして、これからはいろんなキモチが生まれるのを楽しみに図書館に通おうと、心に決めた次第である。

法学部法学科4年 向居 和也

私は図書館を週3、4回ほど利用していますが、その全てが勉強や調べものをするためだけに利用しているわけではなく、ただ新聞や雑誌を読んだりソファにどっかり座って暇を潰しているだけだったりすることも多いです。

私にとって松山大学の図書館は自然と落ち着ける場所の一つ

になっています。

私にとって一番実用的な図書館利用は教科書を借りることです。大学で講義を履修する上で教科書は大抵買うのが普通だと思いますが、現実的に教科書を買ったけどあまり使わなかったり、使ったとしてもその後テストが終わってしまえば利用し

なくなるのが必定です。しかも私は法学部なので法律の授業をほとんど履修していますが、法律は生ものなので改正があれば使い物にならなくなります。これではもったいないので、ひとまず授業は図書館に教科書が置いてあれば指定された教科書を、無ければ仮に民法ならば民法の本を借りてしのぎます。指定教科書でなくても科目が同じならば内容も同じはずですから、問題ないと思います。それに人によって使いやすさ等は異なりますから自分の使いやすい本を選べるメリットがあります。当然返却期限になったら返してまたすぐ借りるを繰り返すわけですが、デメリットもあります。まず図書館の本ですから書き込みができないこと、そして試験期間中は図書館では貸し出しを禁止しているため家に持ち帰っての勉強はできません。そして、最大の問題は教科書持込可の試験では圧倒的に不利なことです。私の場合は逆にこれで自分を危機に追い込むことで授業も真面目に出てノートをしっかりとるようになりました。どうしても

キツイのは教科書を買いましたが…。しかし、これらを除けばコストパフォーマンスは最高だし、何より図書館に何度も行き来するので自然と勉強するようになります。図書館は色んな人が利用しますが、閉館まで勉強している人を見ると自分もやらなきゃなという気持ちになります。

実際私が生きて証人です。1, 2年のときは図書館をあまり利用していなかったのですが、3年から頻りに利用するようになり利用回数・利用幅も広がっていきました。今は卒業論文用の本と息抜きのために読むベストセラーなどの小説を借りることが多いです。また4年になって授業はほとんど無くても、自然と図書館に足が向いているのが今の私です。図書館は絶対有効活用すべきです。最初は広すぎて分かりづらいかもしれませんが、何度も足を運んで自分のベストプレイスにしたらいかがでしょうか。ただし、マナーを守って静かにね。

私が薦めるこの一冊

—— 経済学部助教授 松井名津



「彼女たち」の 連合赤軍

大塚 英志著

分類番号：367.21/O 41/1

配架場所：開架（3階）

人文社会基本図書コーナー

：同級生の男の子からのエール？

女であることは苦しい、とつくづく思う。この本を読むとさらにつくづくと嘆息する。私が「女であること」に気がつく前に、連合赤軍の中では「女であること」「母であること」が抹殺の理由となった。でも小学生の私には関係がなかった。「セックスをする自分」と「考える自分」との間の懸隔に気がつきながらその間をつなぐ方策もないままほったらかしにしていた大学時代、何となくフェミニズムが嫌いだった。何故かという理由もわからないままに。結婚はしたが子供はほしくなかった。はよりの消費生活をおっていたわけではなく（時給650円、手取り13万円。金なし暇なしの身にバブルは遠かった）、子供が怖かったからだ。いま、子供を持って臆面もなく「母」をしている。

個人的な話を長々と書いたのには訳がある。大塚氏は連合赤軍以来つまり戦後の消費社会以来の「女性性・母性」を、その時代を生きてきた女性の日々の生活において考えているからだ。女としての生きにくさを声にすることが出来ず、その声を左翼運動に見出した連合赤軍の女性。けれどもその中で女性性とくに母性は消滅されるべき存在だった。左翼運動から脱落した女性を巡る問題は、やがてフェミニズムとして開花する。フェミ

ニズムは女性の可能性を拡大し、消費社会の爛熟は物質的にも活動的にも女性の行動範囲を拡大した。しかし「母」はいなかった。少女漫画は女の子の体と心の問題を描くために独自の表現形式を築き上げながら、母性をうまく描ききれずに終わる。そして今、出産本のブームがきている。かつて「母」を忌避あるいは拒否してきた女の子は、何故どうして母になれたのかという問いを自覚的に問うことなしに「神秘体験」を下に母であることを無邪気に肯定する。以上のようなこの本の内容と、私の履歴は微妙に重なり合うからだ。それは偶然ではない。なぜなら大塚氏は同年代（60年代前半生まれ）の同級生の女の子のために、寡黙な彼女たちのために、何故かおしゃべりな僕が書くのだというからだ。

そして宛先である同年代の彼女たちの一人である私は女であり母であることの難しさのために息をついてしまうのだ。いったん自ら拒否してしまった母としての役割を無自覚にしか引き受けられない（自覚したら大変だ、自分の行き方を否定することになりかねない）ことに。再び言葉のない時代がきているのかも知れない。かつて（70年代）自分の中にある居心地の悪さの表現を左翼思想に見出した連合赤軍の女性たちが、言葉を見いだす以前に置かれていた状況が再びきているのかも知れない。母であることに何ともいえない居心地の悪さ、気味の悪さを覚えながら言葉にならない時代が。その思いに答える表現が出てくるのかどうか。それは私にはわからない。けれど一つだけおしゃべりになった「彼」に答えたい。私の思いは今までのような論理の言葉では表現されることはないだろうと。なぜなら黒でもなく白でもなく、受け入れたのでもなく拒否したのでもない、その粟井の中に私はいるからだ。

—— 経営学部講師 松本 純



ジャパニーズ・ドリーマーズ -自己イノベーションのすすめ-

米倉誠一郎著

分類番号：335.13/Y 266/2

配架場所：開架(4階)指定図書コーナー

本書の著者である米倉誠一郎氏は、今の日本で最も元気のある学者の、そして周囲の人間に活力を与えてくれる学者の一人であると思う。氏は本書以外にも、『経営革命の構造』（岩波新

書）、『勇気の出る経営学』（ちくま新書）などの書物を近年相次いで上梓されている。本書を含む三冊に共通して氏が訴えかけているメッセージは、変革期にある日本経済を決して楽観視してはいけないということ、そして、それに対して「自分たちでもやれるんだ」という意識を持ちつつ「自己イノベーション」を起こすこと、簡単に言えば、勇気を持って行動せよ！ということである。「行動する学者」である米倉氏は、新聞やテレビの枠を飛び出して、今では東京の新名所、六本木ヒルズに併設された教育機関、アーク都市塾の塾長に就任し、21世紀を考える日本人に向けて直接元気を与えるようになった。そういった意味で、最近では、氏自身が「経営革命」の理論的な担い手にな

っていると言っても過言ではないだろう。

そんな米倉氏が、経営革命を生き抜いてきたロールモデルを、独自の軽妙な筆致で紹介する書物が、本書『ジャパニーズ・ドリーマーズ』である。ここには、2003年9月23日に本学で講演をされた、「地方を揺り動かす台風娘」セーラ・マリ・カミングス氏も登場する。他に、「エリートコースを飛び出て」インターネット・ショッピングモール『楽天市場』を立ち上げた三木

谷浩史氏、中学校にも満足に行けぬ病床でインターネットに出会い、15歳で起業された家本賢太郎氏などが、まるで身近な存在の人々であるかのように紹介されている。本書を一読することによって、失敗をおそれてはいけない！、また、自分たちでもできるかもしれない！という意識を持つようになることは、間違いない。勇気もらえる本書は、とりわけ学生諸君にお薦めの一冊である！

——統計データで見る松山大学図書館——

図書館利用状況推移表

※貸出冊数は研究室分を除く

	入館者数	貸出冊数	閲覧冊数		
			開架	閉架	小計
1999年度	217,672	47,807	82,681	11,458	94,139
2000年度	220,574	49,377	73,299	12,132	85,484
2001年度	222,166	55,394	82,063	12,035	94,098
2002年度	230,233	58,482	74,087	12,488	86,575
2003年度	162,738	40,848		7,479	

『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申込み件数			他館からの受付け件数			合計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
1999年度	338 (43)	175 (23)	25	242 (15)	2 (0)	10	792
2000年度	363 (41)	140 (15)	2	451 (35)	39 (8)	9	1,004
2001年度	268 (23)	177 (13)	3	499 (51)	52 (9)	12	1,011
2002年度	493 (92)	230 (40)	4	829 (90)	52 (12)	27	1,635
2003年度	427 (51)	218 (34)	7	531 (56)	34 (14)	13	1,230

※〔〕内は謝絶の件数

1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した。

『編集後記』

本来は、11月1日発行予定の本号でしたが、編集責任者の図書館事務部情報サービス課長川口 隆氏が、去る9月2日急逝されたことにより発行が遅れました。このことをお詫びするとともに、故川口隆氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今回はこのような次第で、毎回8ページの編集で発行してありましたものを4ページでの発行となりました。この点につきましてもご了解をお願いいたします。

さて、本号の巻頭言は「地域は資料の宝庫」として、大学の地域貢献活動を松山大学図書館へ寄贈・寄託された資料から、研究機関である大学が「地域の人物の活動の記録を掘り起こし、また、地域の人と一緒に研究することは立派な地域貢献活動と言えると思う」と、川東先生からのメッセージをお届けしています。

大学の地域貢献活動は、様々な姿、形が皆さんの目には映っていることと思いますが、日々の大学の活動の全てが地域と密接につな

がり、係わり合い、評価されていると言っても過言ではありません。

その中で、研究機関である大学の持つ役割の一つとして今回のような貢献の形が伝えられることは、大きな成果だと思えます。

次に、図書館の「有効利用法」を人文学部、法学部に在籍する2名からそれぞれの利用法を紹介してもらっています。本当に、図書館に対する「おもい」が伝わってきます。こんな気持ちを誰もが持ってくれたら……。私たちももっと心を込めた対応を心がけたいと思います。

また、『私が薦めるこの一冊』は、松井先生がご自分の体験と本書からのメッセージを重ね合わせた紹介を、松本純先生は本書からのメッセージとして勇気もらえる本との紹介がされています。

平成16年の初春を迎え、松山大学図書館は図書館システムの新たな導入を控え、利用者サービスの一層の向上と親しみやすく利用しやすい図書館を目指して行きます。

松山大学図書館報 No.32 2004年1月15日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL (089) 925-7111 (代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: mu-libs@gc.matsuyama-u.ac.jp